

主こそ我が王

「詩篇」96篇1～13節までを朗読。

10節「もろもろの国民の中に言え、『主は王となられた。世界は堅く立って、動かされることはない。主は公平をもってもろもろの民をさばかれる』と」。

どんなことにも、中心になるものがないければ、すべてがバラバラになってしまう経験をします。家庭でもそうだと思います。最近、家庭崩壊などよく言われますが、戦前の民法の時代は、家督制度というのがありましたから、誰が、家族一族の中心であるか、はっきりしていました。それに不満を抱いた人もいますが、長男というのは絶対的な地位。だから、次男、三男と、何人子供がいても、長男以外は皆、それに従う者であり、長男が本家を継ぎ、その家の中心となる。そういう家族制度が長く続いていました。ですから、そこに一本筋が通っていたわけです。私の父は、次男だからと言って、なぜ自分はこんな目にあわなければならないと、早く生まれたというだけではないかと。そういう不満分子を抑えるためには、これが中心だというものを置かなければ、バラバラになってしまう。戦後、民主主義が浸透して、今の社会になってきたわけです。今は家庭にあっても、お母さんが中心というのが多い。父親の影がない。そうすると、いろいろなものがちぐはぐになりやすい。だからと言って、昔の世界に戻った方がいいとは必ずしも思いませんが、いずれにしても、何か中

心になるべきものがないと、バラバラに失われてしまいます。すべてのものを一つにまとめられるための力、求心力が欠けたのが、今の日本の社会であり、家庭でもそうであります。

また今は、世界規模でそういう事態が起こっています。かつては超大国と言われる国が世界をリードして、一つの秩序ができていた。ところが、それが崩壊して、いろいろな国が力を持ってくる。二つも三つもの国が、利害が衝突するようになって、まさに、今や戦争でも起きそうな、厳しい状況に落ち込んでしまった。一つにはアメリカという国が、いろいろな意味で制度疲労と言いますか、力をなくしてきたことがあります。それと同時に、他の国が力をつけてきたこともあります。かつてソ連邦という国がありました。今はもうバラバラになって、ロシアやその他の小さな国、民族に分かれてしまった。強力な力が失われると、分解していく。今、中国が一番恐れているのは、そこです。共産党という党組織を絶対的な力として、そこに50いくつかの、雑多な民族がいます。中国人と言うと、一色に塗りつぶしますが、その中には、多くの少数民族から漢民族に至るまで、たくさんの民族がひしめいている。それぞれが自分たちの主張を持っていますから、それを一つにまとめ上げ、統一していくためには、強力な力がないとまとまらない。

どんなことでもそうであります。組織をきちっとまとめ上げて、それを運営していくには、中心になるしっかりとした柱がないとどうにもならない。バラバラに、分散してしまう。そして、本来発揮すべき力が失われて、それぞれが勝手にやってしまう。それは見えるところ、組織であるとか、国であるとか、家庭であるとか、社会であるとか、そういうレベルだけでなく、もっと根本的には、人の心に、私たちの心の中心に何があるか。これがはっきりしないと、自分の心にもいろいろな思い、考えること、激しい情欲、様々な感情、激情があります。それがぶつかり合う。その結果、自分で何をしているのか、訳が分からなくなってくる。こうしていると思ったら、次の瞬間、別の事が、常に自分の心の中心にあるものが変わっていく。わがままという言葉を使いますが、自分の感情に支配され、激情に支配され、欲望とか、情欲があって、支配されている限り、私たちを引きずっていかうとします。

その心をきちっと治めていく力はどこにあるか。自分の中にはない。私たちは自分でそれをなんとかコントロールして、きちっと整えていきたいと思いつつも、何かにつつも引きずられ、こうしたいと思いつつもできない、こうしたらいけないと思いつつもやってしまう。そのように、常にいろいろな力が私たちの心を引き張って、不安や恐れ、心配や思い煩いへと、私たちを引きずり込んでいく。その一番の原因は何か。すべてにまさって中心にあるべき王なるお方、言うならば

中心点ですね。主と言われているが、これが私たちのうちにはっきりとしていない。中心がぼやけてしまう。というか、存在しない。そうになると、とても大きく揺れます。しかもいろいろな外側からの刺激、見える状態や、聞く音ずれ、様々な周囲の出来事に、心は翻弄されます。なぜならば、立つべき、寄り頼むべき軸、中心軸がない。いろいろな事にあう時、それが明らかになります。普段、事無く、平々凡々と生活している間は、心穏やかにやれているように思いますが、いったん何か事が起こると、自分の利害に関わること、自分の名誉や地位、あるいは命にでも関わるような病気や何かの事態が起こると、突然、私たちの心の中に、様々な感情や恐れのようなものが湧き上がってきて、私たちの心を揺り動かし、自分が支配しようとしみます。そこで内に争いが起こります。自分の心の中に様々な戦いが起こります。これが私たちの一番不幸な姿です。中心となるべきものを失っている結果です。

罪の結果と、聖書は言っています。確かにそう思います。ですから強い力を振るうもの、父親であるとか、ご主人であるとか、力を持った者がガツンと頭から叱ってくれた方がかえってシュンとおとなしくなれる。ところがそれは一時的に外側からおさえるだけです。内側に自分の中心が出来たわけではありません。それはひとまず、そこで治まるように思いますが、またすぐ復活してきます。いつでも支配しようと、私たちの心を攻めてきます。何よりも私たちに必要な事は、

いつでも、どんな時にでも、私たちの中心にあって、しっかりと支配してくれる力です。「支配されるのは嫌だ」と思いますが、私たちは誰かによらなければ、立てないのです。それを選び損なうと、とんでもないことです。

10 節に「**もろもろの国民の中に言え、『主は王となられた』**」とあります。王なるお方、それは誰のための王か。実は私たちのための王となる。私たちの内にある、内なるものを支配して下さる。ですからイエス様がお生れになった時に、東の国から来た博士たちがエルサレムに來まして、ヘロデ王のところへ行きました。そして「ユダヤ人の王としてお生れになった方はどこにおられますか」と尋ねた。ユダヤ人の王なんて、目の前にヘロデ王がいるわけですから、とんでもないことを言う。ヘロデ王としては心外でありませぬ。自分の知らない所で、「そんな王様がいるわけがない」、言うならば謀反です。一つの国に二人の王様など、とんでもない話です。ヘロデ王は胸騒ぎがしたと記されています。胸騒ぎどころではない。腹が立ったに違いない。エルサレムの人たちも不安を感じたと語られている。これは内戦になる、戦いになるぞと思ったでしょう。

ところが、東の国からきた博士が求めたユダヤ人の王とは、この世の王様という意味ではありません。だからこそ、ヘロデ王の所に來たのです。ヘロデ王にとって代わるこの世の王様、その当時の時代を支配し、ユダヤの人々を支配する王

様を求めてであれば、そこには来ないでしょう。博士たちが求めたのは、私たちの全ての人の心を支配してくれる王、私たちの王となって下さるお方。これを「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」と語っているのです。そして彼らが行きついた先が、ベツレヘムの馬小屋であります。そこに見る幼子は、世の人と違った特異な風貌であるとか、奇想天外のわざができるわけでもない。実にありふれた、人の子としての姿です。しかし、博士たちはこの方こそ王なるお方と確信しました。黄金、乳香、没薬などの贈り物をもって、礼拝した。王でいらっしゃるお方、黄金をもって、「あなたは私の王です」と告白した。また乳香、没薬という祭司の役割、あるいは神様にささげるいけにえとしての供え物であります。まず何よりもそこでささげたのは、黄金であります。黄金、すなわち王のしるしとしてのイエス様を、彼らは礼拝したのです。その時のイエス様は、決してこの世にあって、政治を行い、多くの民族を支配する者として、王になろうというお方では決してなかった。それどころか、この世の王ではなく、私たちすべての人の罪をきよめ、肉の力に振り回されて混んとした、心の王となるために來て下さった。その時、命を絶たれた十字架には、「ユダヤ人の王」と札がかけられました。周囲にいた人が、「そんな名前はやめてくれ」と言ったのですが、「そのままにしておけ」とピラトは命じます。ユダヤ人の王が、十字架におかかりになった。イエス様の生涯に貫かれているのは、王としての主であります。それは私たちの王と

なるために来て下さった。救い主でありますから、私たちを救って下さるお方ですが、この救いとは、とりもなおさず、私たちがイエス様をわが王として、私の王として、心に迎える事。イエス様は私たちの最大の敵であるサタンの、罪の全てを、十字架に打ち破って下さった。王様が国を守るのは当然の義務でしょう。王の役割は、自分にゆだねられた国民の平安と安全、すべてを守る。イエス様は最大の敵であるサタンを打ち破って、罪から私たちを解放して下さい。これが王の役割であります。

ところが、イエス様が十字架におかかりになる時、多くの人たちは、目に見えるこの世の王になってもらいたいと思った。ローマの圧政の下に置かれて、属領となっていたユダヤの人たちは、そこから解放されたい、かつてのダビデのような、イスラエルの国を再興してほしい、そういう願いがありました。何かやってくれるに違いない。クーデターを起こすかもしれないと、虎視眈々と待っていた。ところが、イエス様は何一つなさない。それどころか、されるがままに、十字架に無残な姿をさらしてしまった。多くの人々は完全に失望しきったのです。それは彼らが求めていたのは、この世の王様であったからです。

イエス様は、博士たちが求めてきたように、「ユダヤ人の王」としてお生まれになった。神様によって造られた人の心を治めてくれるお方。神と人とが一つになっていくための王としての役割を果たす

ために来て下さった。私たち全ての者の罪を取り除いて下さった。そして私たちを「あなたはわたしのもの」と、神の国の民として下さった。今、私たちは神の民、神の家族、神のものであると告白します。しかしその意味は、王として、イエス様を私たちの内に迎えることに他なりません。イエス様は私たちの王となって下さったのであります。敵である罪に捕らわれた者を解放するために、十字架に命を捨てて下さった。そればかりか、よみがえって、文字通り、いつでも、どんな時にでも、私たちと共にいて下さる。御霊なる神となって、私たちの内に宿って下さる。

宿って、いつでも一緒にいて下さるといって、すごく親しい、自分の分身のような親しい関係に思いますが、実は王として宿って下さる。友だちではない。私たちは「イエス様」「イエス様」と気安く言いますが、考えたらとんでもない話です。王様でありますから。私たちは王様に仕えるという経験がありませんから、どういう風にしたらよいか、わかりませんが、王としてイエス様を尊び敬うことです。王なる神様、王なるイエス様に私たちは仕えていく、神の僕(しもべ)です。この関係をしっかりと自覚しておきたい。イエス様は「わたしはあなたを友と呼ぶ」と言っていて、友となって下さることは、親しみを込めて、イエス様からの私たちへのメッセージであります。しかし友達のように、軽く、あまりにも近い、遠慮のない接し方をする。イエス様は遠慮するなどおっしゃいます。このへんは難

しい所ですが、やはり敬虔な思いで、イエス様に尊敬の念、畏れの念を持つことは、私たちにとって大切な事です。

ですから今、イエス様が私たちのうちに神の霊となって、キリストの霊となって宿って下さって、常に私と共にいて下さる。その共にいて下さるイエス様は、王としてであります。それが10節の「**もろもろの国民の中に言え、『主は王とられた。世界は堅く立って、動かされることはない。』**」ということです。イエス様が王となって、私たちの心にしっかり中心に座っていただく。その王に仕える自分という関係を、いつも心にとどめていきますならば、私たちの心は動かない。堅く立つ。不動のものとなります。決して動かされることはない。何があっても、どういう問題が起こっても、どういう悩みがあっても、ここに王がいらっしゃる。私が王で、イエス様は時々助けてくれるという、そういう関係ではなくて、王なる方が、今、この問題の中にも、この悩みの中にも、私が受けている事態、事柄の中にも、ここに王なる主が立っていらっしゃる。私に責任があるのではない、私がしなきゃならないのではなくて、王なる方が、その事を支配し、みこころをなそうとしている。

わたしたちは何をするか。王の僕になるということです。そこに徹することが、王を王とすることです。ここに主は王とられた。「王様となったそうだ。でも、私は知らない」、「私とは関係ない」と言ってしまったら、それでおしまいです。

現実の王様はどんなことでも、従わざるを得ない。しかし、王となったイエス様は、目に見えるわけではない、手で触れるわけではない、耳でその声が聞こえるわけでもありませんから、居るのか居ないのか分からないと思っています。大切なのは、ここです。イエス様がいらっしゃることを信じて、そのように生きること。王なるお方がいらっしゃる信じますならば、常に王に心を向け、まさにそこにおられるがごとくに、私たちの行動においても、語るにおいても、すべての事において、王なる主がおられますと徹底して信じ、その方に自分を低くしていく。こうすることによってはじめて、主は王とられたと言えるのです。

ダビデは羊飼いでしたが、王の位に就けられました。自分がイスラエル王国の王様であるということは否定しようがない、はっきりとした事実であります。ところが、王であるダビデは、決して自分が王様だとは思わなかった。それどころか、自分には王がいらっしゃる。そこに常に目をとめていた。詩篇16篇を開きたいと思います。

「詩篇」16篇1,2節を朗読。

表題にダビデのミクタムの歌とあります。これはダビデの信仰の証しです。1節に「**神よ、わたしをお守りください**」と祈っています。「**わたしはあなたに寄り頼みます**」。おそらく部下がこんなことを聞いたら、「なんだ、頼りない王様だ」と思うでしょう。「皆、俺に信頼しろ。俺が

王様だから、俺に頼ってれば、決して食いっぱぐれることはない。安全を保障する。幸せにしてやるぞ」と言えがいいのです。ところが、ダビデは決して、自分が王様だからと、わがままで横暴なことは一度もない。彼は王様だろうと、羊飼いだろうと、常に私の仕えるべきお方。私が王とすべき方は誰であるかを知っていました。だからここでも「**神よ、わたしをお守りください。わたしはあなたに寄り頼みます**」。私はあなたに頼らなければ、自分でも守れない。「神様、どうぞ、私を守って下さい」。そればかりか、2節には「**わたしは主に言う、あなたはわたしの主**」とあります。彼は、「私の主は、神様、あなたです。あなたはわたしの王です」。そういう意味であります。「あなたがいらっしゃらなければ、わたしには幸はありません」と、これが王の言葉かしらと思います。王様だったら、もう少し威風堂々と、誰が聞いても、「この王は頼りになる」と思わせるような事を言わなければならない。ところが、彼は「あなたに寄り頼みます」「わたしの主はあなたです」と。ダビデにとって、常に自分が王ではなくて、「神様、あなたがわたしの王です」と、そこに徹底して、常に自分を低くする。これが王を王とする、神を神とする生き方です。だから私たちも「**主は王となられた。世界は堅く立って、動かされることはない**」と信じて、この方の前に心を低くしたい。

では、その王様はどこにいるのか。今、私たちの内に宿って下さるキリストこそ、私の王。王様に向かって、常に「わたし

はあなたに寄り頼みます。あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸はない」。徹底して、私たちはそのお方に心に向け、思いを向け、常にそこに心に向けていく。いや、わたしは父親だから、わたしはこういう身分だから、こういう役割を持っている、わたしはこうなんだから、私が何とかして頑張らないと、そんなことを思う必要はない。王なる方に全てをゆだねて、わたしは何をすべきでしょうか、しもべとなりきっていくこと。それが王を王とすることです。16篇の8節以下に「**わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない**」と告白しています。常に主をわたしの前に置く。たえず主に従う、主に仕えていく。その時、私は動かされることはない。

「詩篇」96篇に戻りますが、10節に「**もろもろの国民の中に言え、『主は王となられた。世界は堅く立って、動かされることはない。主は公平をもってもろもろの民をさばかれる』**」と。王なるお方が、すべての事をご存じで、王なる方がことごとく決定し、実行して下さい。報いて下さる。ここに「**公平をもってもろもろの民をさばかれる**」とあります。神様はみどころにかなう事、正しい事をきちっとして下さい。ダビデは生涯を通じて、この姿勢を変えませんでした。何があっても、「わたしの仕えるべきお方は、主よ、あなただけです」と、神様に向かって、たえず思いを向ける。どんな境遇に置かれようと、王の位にいようと、あるいは息子から謀反を起こされようと、

そこで「あいつがいかん、こいつがいかん」と言うよりも、これもまた主が、神様が、王なるお方が私に備えられた道。また神様は善しと思うことをして下さるに違いない。私たちはいろいろな問題の中に置かれます。その時、ここに誰が中心に立っているのか。わたしが王としているお方は誰なのか。そこをはっきりと自覚していきたい。

「ローマ人への手紙」6章15～16節を朗読。

16節に「あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕である」と。今、あなたは誰の僕になって、誰に服従しているのかと問われる。私はイエス様の導かれるところに従っていますというのであれば、イエス様の僕。王を王として、「イエス様、あなたはわたしの王です。今このことを支配していらっしゃるのもあなたです」と、はっきりと王を認めて、王に従っていこうとする時、イエス様は私たちの王となっていただくことができる。そうでない限り、いくら「主は王とられた」と言われても、私とは関係がありません。私が従っているのは、自分の感情、欲望、情欲に従っているだけのこと。あるいは、この世のしきたりや習慣を王として、それに従うなら、そのものの僕になってしまう。

ここに、「あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕

ともなるのである」と。私たちは、誰の僕となっているのでしょうか。あの人の言うことを聞かんと、どうにもならない、いつも怒られるから、あの人の言うとおりにしておこう。それなら、その人の僕となる。私たちは今、誰に従っているのか。誰の思いに支配されているのか。自分の心を探って、あのダビデのように、いつでも、どんなことの中にも、「あなたはわたしの主、あなたのほかにわたしの幸はない」、主よ、あなたはわたしの王です、主ですと、いつも主を私の前に置いておきたい。

この世の中もそうですね。神様が全ての人の王となって下さるのならば、今、見るような混沌とした世にはならないのです。そればかりか、私たちの生活でもそうです。今、日本の社会のいろいろな問題の中にも、王なるものが失われてしまっている。中心になるものがないからです。私たちの心の中心に、まず、「主よ、あなたはわたしの王です」と、王なるお方をしっかりと心に据えて、そのお方に従う者になりたいと思います。

ご一緒にお祈りいたしましょう。